

馬場孤蝶

一葉の手紙

一葉の手紙

一

嘗て読売新聞に樋口一葉君から半井桃水君に送った手紙が公にされたが、その中に、

「此ほどは思ひもよらぬ賜ものありがたく折ふし不在にてしげ様に御目にもかゝらず、御前さま御近状をくはしくは承り得ざりしこといともく、残念にて、ことに鎌倉へ御旅行とか伺ふはもし御病氣にてはなきやと御案じ申

候ひぬ。御様子うかゞひながら、御礼申度と存じ居候ひしかど、憚る処なきにしもあらで心ならずも日を送り申候。

今日しもめづらしき御玉章、おんたまづさ久々にて御目もじせし心

地、うれしきにも又お恨みの御詞がうらめしく候、私愚ぐどんの身人様をしるなど、申すことかけても及ばねど、師の君なり兄君なりと思ふお前様のこと誰人が何と申伝へ候とも夫それを誠と聞く道理も無く、もとよりこしらへごとゝは存じ候故別して御耳にも入れざりしに候、我さへしらぬ事をしる世の中、聞かぬ事を聞くかと申す仰せ、

さしてあやしきことにもある間敷まじく、御捨置き遊ばし候とも消ゆる時にはきえ候はんかし。

かく計らぬ事より御目通りの叶はぬ様に成しもやむを得ぬことゝ私はあきらめ居候、今更人の口に耳も立たてず只身一つをつゝしみ申居候。

さりながら其源は何方いづかたにもあらず、みな私より起りしにて此一事のみにも非ずひまあれかし落しいれんのおとしあな設けられし身、いかにのがれ候とも何の罪かきせられずにも居る間敷と悲しく決心をきはめ居候。

唯々先日野々宮さまにおことづて願ひ候しとほりお前

様御高恩のほどはみなく、身にしみて有難く日夜中暮し候ものゝ其御親切仇にして御名前をけがし候こと何より心苦しく愁^つらきはたゞ是のみに候、申上度こといと多けれど、さのみはとて御返しばかりをなむ、猶々願ひ参らするは何方へ御転住相成とも何とぞ御住所御しらせ置きたまはり度、又折ふしは一片の御便りもと夫れのみ苦中のたのしみに待渡りまゐらせ候。かしこ。

折しもあれ初秋風の吹きそめたるに、虫の音の時しりがほなるなど、月にもやみにも夜こそものおもはれ候へ、露けき秋とはつねぐ、申ふるせし詞ながら、袖の

上におく今日此頃ぞ誠にしかとは思ひしられ候。世の中
 の心細さ限りなく私こそ長かるまじき命かと存じら
 れ候、先頃より脳病にて自宅に帰り居候を又さる人々
 のあしさまに言ひならすとか兎にも角にも誠うき世は
 いやに御座候

八月十日夜

なつ子

御兄上様御前」

というのがあつて、それに「私しこそ長かるまじき命
 かと存じられ候とあるを見ては何人か涙なからん女史は
 実に此年の秋廿六歳を一期として逝かれたるなり、真に

悲惨の極みならずや」という評語が付けてあつた。此評語を付けた人は前期の手紙を二十九年の八月十日の夜に書かれたものと臆測されたものらしい。

所が、私どもは此手紙は二十五年八月十日の夜に書かれたものと断ぜざるを得無いのだ。

一葉全集中の『日記』に依ると、半井君と一葉君との間に世間の疑が生じて居るということを一葉君自身が明に耳にしたのは、二十五年の六月十四日の夜、中島歌子刀自の許であつて、中島氏の忠告によつて、一葉君は半井君と一時交際を絶つことになつて、同月の十五日に

半井君を訪うて、「中島家が人少なであるから、手伝ひの爲め暫時中島家に行つて居らなければならぬ、就ては小説を書く暇も無からうから」というようなことを云つて、半井君との交際を絶つ前提を設けて置いて、同二十二日までは、一葉君は中島家に宿つた。同日になつて、再び半井君を訪うて、事情を残らず打ち明けた。それから七月十四日に中元の礼に半井君を訪うた。「君今日何方へか転居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る」とあるのだ。それから二十五年十一月十一日に至るまでは、半井君と一葉君との面会の期は無かつたようだ。

二十九年八月頃には半井君と一葉君との間に物疑いを入れるような人は殆ど無かったようだから、半井君と一葉君との間に前記のような文面の手紙をやり取りすべき何等の事情も無かったようだ。『日記』中の前記の部分だけ見ても、手紙の二十五年八月十日夜のものであることは明らかなのだが、『日記』には未だもう少し確なことが書いてある。「午後より野々宮君来る、終日詠歌す、半井君の事種々ものがたる」とあり、八月六日「此日半井君より重太郎を使者として茶一筒おくらる」とあり、同七日「野々宮来訪、終日歌をよむ、半井君を訪給ひし

よし、我事に付ての談話ありしやに聞く」とあり、同十日「半井君より長文の手紙来る、返事したゝむ」とあるのだ。一葉君は二十九年十一月二十三日、年二十五で死んだ。一葉全集後篇の巻頭の文の中に書いてある明治五年三月二十五日という一葉君の生年月日は間違つては居無いそうだ。

二

一葉君は、半井君に宛てた手紙でも知れる通り、手紙の文句の実に旨い人であった。私は二十八年八月の末から三十年一月へかけて地方に居たので、文学界の連中のなかでは、一葉君から割合に多く手紙を貰らって居るのだが、皆旨い文章なのだ。一葉君の作物は今度出る一葉全集で大抵まとまる訳だが、まだ詠歌だけが殆ど全部残って居る。併し、それは、一葉君の十五位の時分から没年までの分が皆集まって居て、非常な数なので、歌集の

出版は歌の選抜になかなか骨が折れようと思われる。私は一葉書簡集を出してみ度い。樋口家でも其の希望があるものと見えて、故人の知友諸君に頼んで手紙を借り集めて居る。

試みに左に一葉君が私に呉れた手紙を写して出そう。郵便局の消印のある封筒も共に保存してあるのだから、手紙の年月日に間違いは無い。

私に取って面白く思われることは、半井君宛の手紙で公にされた分は何れも一葉君の小説家として未だ名を成さなかつた時分のものであるに拘らず、文章は矢張り旨

いことであるのだ。『日記』で見ても分ることだが、一葉君は初から文才の表われた人なることは確かである。

*

「こゝろのほかの御無沙汰に打過ぎいかやうの御しかりをうけ候ともたゞく恐れ入り候ほかもなけれど、さりとて一返りの申しわけはゆるし給へ、はじめの御手紙たまはり候ころより中島の師こと酒勾さかはへ遊びに参り留守のこと何くれとたのまれ候まゝ大かた日ごとの用事おほく家に居るはまれなるやうにくらし居り、おもひながらも思ふにまかせねば、此方より御恨み申上べき筈をあべこ

べに相成候、さりとはくやしきことなれど、此度は御詫び申上置べく候。

俄にきのふ今日秋風のたちておどろかるゝやうに候へども、御地は如何、このほどの御文の御様子にては、いよいよ御盛んの御勢ひ、こゝなる人々い**ばかり**か斗うら山しういらせられんかとをかしく候、むらさきの矢がすりを見過したるの、曾根崎あたりかけぬけ候ひしのと、少しあやしき御事どもたやすくは受とりがたき御話しなれど、御気まぎらしといふわけならば御尤様とてうなづき申べく、それはみをつくしの床しかりし御方さま空しき

烟りと成給ひしよし承り及べばに御座候、湖水の月に打
むかふてそゞろにもものを思しめすお前様の御姿こゝにも
見ゆるやうに御座候、哀れ成し人の為、かつは御身の罪
ほろぼしがてら、みをつくしの後日といふもの是非かゝ
せ給はねばかなはぬ事と存じられ候、箱根にてはじめて
その便りを聞得給ひし時御愁傷どのやう成しかまだどな
たにも御目にかゝらず候まゝ御様子承ることかなはず、
唯大方に御悔み申上置候。

学校はもはや御始まりの事なるべく、さのみ御面倒も
なきやうに承り候が、交はり給ふ御方々はいかやうにや、

御癩癩にさはるやうの事ありてはと、夫れのみ御案じ申され候、御からだも其様に御丈夫ならず、御健おすこやかには入らせらるべけれどお弱きやうに存じられて兎に角御ころのやましからぬやうにと祈られ候、常に御目通りのかなひ候ころはたゞ事なく打過ぎ候へども、かく御遠方にはなれ参らせたることゝ存じ候へば、俄にさびしくころ細く候て、此ほどの月のよなどは打寄りて御うはさのみ申居候ひし、汽車といふものなればこそなれど、百里といふは大方の事かは、山もあり川もあり、俄におもひ立て何を申すもかなはぬに候へば、空のみながめらるゝ

などゝいふ人事をさへ思ひ合せられ候。

此ほどの御末文かたじけなく拝し候、勉強せよと仰せ下さる御方は私の為の守り本尊なるべくそのやうに仰せ下さるをたのみにはかなき文をも作り出で可申、笑ひ給はで御教へを願はれ候やうこれは見かけての御願ひに御座候。此月は文学界にての拝見かなふまじくや、其あたりの御模様さぞかしく、ろ楽しみに候、申度こと多けれど筆がまわらず候まゝ此次にとて。

このほどは伯母と仰せ下され候あれは返上致し置くべく候、我身の老ひを嘆くといふ訳にはこれなく、勿体なき

事なれば恐入りての返上に御座候、何も此度はあらく、
何れ不日ふじつ又々御邪魔いたすべく御目をおかし下さるべく
候。

草々 かしこ

なつ

十七日夜

馬場様御前

母よりも妹よりも何卒よろしく申上くれと返すぐ申
出に御座候」

これは、二十八年九月十九日の手紙だ。私が彦根から

大阪へ一寸と行ってから、便りをしたので、その返事のやうによこしたものだ。「紫の矢がすり」と云ふのは、京都の或る町を歩いて居た舞妓か何かのことを書いてやったのだと思ふ。曾根崎は實際車で馳通ったのみであった。「みをつくし」の女といふのは、箱根温泉宿の女中で、米神こめかみという村から来た確かおくらとか云った女であった。一寸器量の好い女であったので何の気無しにほめた所が、同人間の噂に上ぼって、一葉君にまで斯の如くヒヤカされるに至った訳なのだ。

三

「御いそがしくゐらせられ候や、たえて御たより承らず、その地はわるき病流行するよしなどかねがね承り居候まゝ、いとゞ心配にたえかね申候、時々文学界のかたがたなどお出も候へども、人様のおかほさへみれば馬場様くとおうはさ申出す事の少しは極りわるく存じられ候まゝ、こころのまゝには御様子承りあはす事もならで、いよく御なつかしさの増るやうに御座候、おかはりな

く御勉強みらせられ候や、萩も薄も下葉やつれて、やがての月に鹿なくころ、やゝ色づきゆく山の梢など御覧ずるにつけて、おん旅寝のおこゝろいかにやとおし料り参られ候、いつぞやのお便りに石山寺義仲寺などよそながら承るだに心ゆく様なる所々御遊覧の御様子うら山しく、逢坂の関よりと遊ばしたるお葉書とゞきたる時は、そゞろお前様の御わらぢ姿、おもかげに覚えて、今も見てしがなと御なつかしさやるかたもなく候ひし、それより絶えておたよりなきは、これよりさし出さぬ失礼を怒り給ひてかとおもひたどられ候に、お詫を申すが厭やな

れば、今日まで我まんを致し居り候へども、もとより女子は弱きもの、まけてもさのみの恥ならず、御なつかしきは何処までもおなつかしきなれば、用なき痩せ我まんにそなたの空のみながめんよりはとて、文したゝめてさし出し候。おひまあらばたゞ一筆お便りつげさせ給へ、文学界のおかたぐなど、おん有様しりたしとならば、親御様の御もとにもはしり給ふべし、私はお馴染もなければ、今俄にお留守を音なひ参らすこともならで、空しくうちくにおうはさ申暮すのみ、汲とり給ひて折々のおたより、夫れのみ待渡られ参らせ候、さても此ほどの

ことにて候ひき、都も秋の空さびしく万よろづにまぎるゝ物なく暮し居候まゝ、一日妹ともなひて飛鳥山より滝野川あたりそゞろあるきすることありしに、ある野道にてふと逢ひたる人のとしは二十四五位にや、そのわたりの野に折りし草花少し手に持ちて、無造作にさつくと歩むうしろ姿似たりとてもいかな事お前様をそのままなるに、追ひかけてお名をも呼び度たきやうに候し、されども、もとよりお前様にてある筈なければ、唯そのかたしろのかげ消ゆるまで立尽して見むくり申候、かゝるおもはぬ野道などにて、おもはずお目にかゝるやうの事あらばと、

はかなき事申あひて歸り候ひしが、その時すぐに文さし
出さんの心成しかど、猶その折はまける事のくやしく、
けふまで打置き候ひぬ、彦根の風に染まり給ひて都をう
はの空におぼさば、かつ弥様とは申まじ、馬場様はその
やうの情なき不実のおん方にてある筈なければ、此頃打
たえおたよりのなきもおいそがしさのまぎれに筆とり給
ふおんいとまのなかるべく、さらばおしては願ふまじ、
唯おのづからお序にとのみを。猶々申上度こと海山、そ
れは十二月おんめもじのふしならでは尽すまじう、たゞ
明くれ指をりてそのほどいと待わたられ候。おんなつ

かしく候かな　かしこ

な　つ

馬場様御もとに」

これは二十八年十月九日の手紙だ。一葉君の『日記』には十月九日「此夜文二通したゝめき。一つは如来ぬし、一つは馬場君きみ、前のはきのふの返事、附ろくの事などいひて、つぎなるは久しう音づれのなきにいかゞ暮らすとおぼつかなくてなり」とある。此返事に対しては、「若い者を感動させるやうな手紙をよこすことなかれ。私だつて何な思ひ違ひをせぬにも限るまい」というような返

事を出すと、急ぐ折り返へして一寸と面白い返事が来た
と思うのだが、その返事の分が今一寸と見付からない。
誰か持って行ってしまったのか、何処か箱の奥にでもあ
ることだか、まるまる無くなってしまったとすると惜し
いものだと思う。

*

「御無沙汰の罪さり所なく候、日ごと夜ごところろの中
にてお詫びは絶えず申上居候へども、頭はれねばそのか
ひもなし、たゞ御ゆるし給はるべく候、いつぞや、お写
真おめぐみにあづかり候折お礼ながら申上度こと数々御

座候ひしかと、今は時おくれて申そびれ候まゝ、たゞ御
 礼をのみ申上候、余程お寒く相成候へどもその御地はい
 かゞにみらせられ候や、相かはらず御盛んに名所旧跡お
 さぐりのことゝ御浦山しく存じ居候、此月末にはかなら
 ず御めもじのかなひ可申か、みな様がたお出にてはいつ
 も其うはさ許ばかり、たとひいかやうにお心ひかゝる物あり
 ても、此地にはおとし寄りもみらせられ候、かならずお
 顔みせにおもどりのやう、これのみを願はしく候、いよ
 く御出京ならば、いつごろ幾日ぐらゐに御めもじかな
 ふべきか、そのほどく待渡られ候、お詫びもおん礼も

またそのほかに申上度ことも取かさね、その折おうるさくお聞きにいたるべく、うきもうれしきも申かはす人なき今日このごろ、たゞ御めもじをのみつまだて、待参らせ候。あらく／＼かしこ。

め
いよりち

かつやをぢ様御もとに」

これは二十八年十二月五日の手紙だ。「かつやをぢ様」とは、ずっと前に私の方から「樋口をば様」という宛名で手紙を遣ったことがあるので、そのしっぺがえしなのだ。

「余り久しき御無沙汰に相成申候。けふはくくと存じながら、日々つむりのなやましさに何するもものうく、本もよまねば手ならひは更なること、人ともものいふもいやにて暮し居り、夫れ故の怠りに候、日々母と妹の右左よりせつきて馬場様へのお返事かけよくとせきたてられ、空しう事のみいひく今日までには相成候所、けさは雨降て物の淋しさに堪へがたく、今小石川の稽古に出づべきなれど、夫れも憂くつらければ、とりとまらぬこととしたゝめ出で申候、私は此春御めにかゝりし頃よりの

病氣さらによく成り申さず、たゞ気がふさぐやうにて困り入候、文学界のうらわか草二十七日に世に出で申候へど、これに何かしたゝむべき約束成しもつい出来候はず、誠に筆など持つこといやに成りはて候、このほど人の訪とひ来て、御もとは近ごろのやうに筆とる事をいやくといふほどにやがて全く物かゝれぬやうに成るべしといはれ申候、さなるべきにや候はん。おもしろしと思ふ事もなし、筆とりて物いはんといふやうな力を入れるゝこともなし、よし又力を入れるゝやうな事ありとも、此方づれがつべこべ何の用をかなし候はんや、無用のことをしたり

顔にして居るほどくだらぬものはあるまじく候。さりとして是れをすてゝ外に何のおもしろき事ありといふにあらず、移らばやと思ふ業もなし、誰れやらが歌に、しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中といふが御座候、断つことのかなはねばこそほだしといふには候はめ、私は日々考へて居り候、何をとの給ふな、たゞ考へて居るのに候、大抵の人に思ふ事をうち明けたとて笑ひごとにされて仕舞ふべきに候まゝ、私は何もいはぬ方が洒落て居ると独ぎめにして居り候、たかが女子に候もの、好い着物をきて芝居でも見たい位の望みがか

なはねば彼のやうにぢれて居るの居るのであらう、といふやうな推察をされて馬鹿にされて嘲弄されて、これ五十年をやつさもつさに送つてそして死んでしまふ事かと思ふに、其死ぬといふ事がをかしくてやつとほゝゑまれ申候、こんな事はどうでも宜いのに候へど、つい御心安だてに下らぬ事を書き申候。

御前様はいよくおふるひ、二等馬車の御威勢をば御しめし下され度待渡り参らせ候、こゝの平田ぬしは男爵末松といふ綽名のもとに揚々としておはしまし候、戸川さまはとかく病ひがちのやうに承りしが、此頃すこしお

ん勢ひよきもやう、御同人として御文通しばぐおはします事なるべく、此度の試けん終り候はゞ、御地へでも遊びにお出かけなされ度おぼし召らしく承り居り候。暑中のおん休みにはかならず御帰京のおん事かと待たれ候、いつ頃よりお休みには相成候や。筆はおもふ事のかゝれで口をしく候まゝ、御目もじの折のみ待たるゝに候。

此ほどはおこころいれの花すみれ嬉しきことは御礼の筆たるまじく、たゞ手なれの書物のうちに納めて長く余香をかたじけなかり居り候、久々にておん姉上様にお逢ひ遊ばされし御嬉しさのほど、蔭ながらもおしはかりさこそ

かしと存ぜられ候、奥様とまちがへられ給ひし由、さて御ゆかりのお文様お広どのなど参られなばいかならん、定めて蜂の巣をつつきたるやうのさわぎ成るべしとをかしくて、どうやら其やうの事あれかしと願はるゝ心地も致し候。

ありし画の事いかさまに成り候ひけん、あの子は今も御身近くに参り候や、にほの海近くにも風流はおはしますものを、みるめなき浦との給ふこと心得ず、箱根は箱根、近江は近江、二かたに分けて同じやうに御あはれびつかはさるべく候。

この文したゝむるうちにをかしき事いろく沸来て猶申上度心地に候へど、時たま文さし上ながら、又口わるをいひ出しよなどの御かげごと佗しく、これまでにとどめ申候。そのうちくかしこ。

三十日

なつ

馬場様御もとに」

これは二十九年五月三十日の手紙だ。「二頭馬車」云々は、一葉君がよく自分の身の上を悲観したような話をされるので、「ナニ僕などは落ちぶれるのは何うしてもイヤだ。馬車に乗る積りでやる」というような冗談を云つ

たことがあるからだ。当時九州に居た私の実の姉が東上の途中彦根へ寄って呉れたことがある。私よりは年が十ほど上なのに、何う間違えたものか中学校の関係者の間に、私の許嫁者が尋ねて来たという噂が広がって大笑をした。姉を昼食に案内した楽々園という料理屋の女中にその噂を話したら、「あれが貴方の奥様では、貴方には重過ぎませう」と云って笑われた。

お文、お広、一人は隣家の小間使、他は箱根の温泉宿の女中である。

画というのは、当時同じ中学校に教師をして居た鹿子

木孟郎君の筆になつた彦根の舞妓の肖像であるのだが、これは後になつて三十八年か九年に太平洋画会へ出したことがある。如何にも笑顔の可愛らしい十四五の娘であつた。

日本文学電子図書館

一葉の手紙

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館